

〔翻刻〕 新城 川村類造手沢本 『高安流脇世理賦附 坤』

飯塚 恵理人

〔解題〕

本書は、明治から戦前にかけて新城を中心に活躍した高安流脇方川村類造師の所蔵されていた本である。本誌の前身に掲載した『高安流脇仕舞附 乾』と一組となっているもので、『高安流脇仕舞附 乾』が所作に関する伝書であるのに対して、主に狂言方との応答である脇の台詞を記した書である。一冊に綴じられているが、前半と後半で筆が異なる。目録も前半・後半の二箇所があり、もと二つの伝書であったものを綴じ合わせたものと考えられる。前半は奥書の書体と同じであることから鈴木九平のもの、後半は筆者はわからないが別人のものと考えられる。前半を（A）部分、後半を（B部分）と呼ぶ。（A）部分の目録の後には「右以上十九番其他番末ニ記ス。此附ニ無之分仕舞附ニ悉皆記在。」とあり、この本が最初は鈴木九平筆の分の十九曲でまとまっていたこと、それ以外の曲については『仕舞附』に書かれていることが記されている。この『仕舞附』とは本書の奥書に「此世理賦附仁・義・禮・智・信五冊之仕舞附ニ相添置候事」に記される仁・義・禮・智・信の五冊組の『高安流脇仕舞附』と考えて差し支えない。但し（B）部分の（26）《阿漕》、（35）《鐘馗》（48）《小塩》（51）《梅枝》（54）《女郎花》に「前《田村》同様」など《田村》の問答と同様の形式であることが記されるが、この《田村》は（A）部分の（1）《田村》の内容であると考えら

れる。従って(A)(B)は全く無関係な伝書ではなく、同系統でかなり関係の深い伝書から別々に筆写されたものだろう。

また、A部分の末尾には、目録に載らない「《船弁慶》船中語」の記事が載る。これは(A)(B)の両方と筆が異なる。(A)(B)を合わせて綴じる際に、その両方になかった記事を一緒に綴じ合わせたものと考えられる。この(20)《舟弁慶》は(B)部分の(30)《船弁慶》にない内容であるワキの「船中語」に関する記事だが、(A)(B)のどちらの部分とも、元となった資料は異なると考えられる。《船弁慶》船中語を含め、本書に納められている曲を目録の記載に沿ってあげると以下のようなになる。

(目録 A)

- (1) 《田村》 (2) 《箬》 (3) 《八嶋》 (4) 《忠則》 (5) 《知章》 (6) 《巴》 (7) 《碇潜》 (8) 《敦盛》 (9) 《玉葛》
- (10) 《浮舟》 (11) 《夕顔》 (12) 《采女》 (13) 《佛原》 (14) 《俊成忠度》 (15) 《花月》 (16) 《小督》 (17) 《蘆刈》 (18) 《海人》 (19) 《松虫》 (20) 飯塚注：目録不記 《船弁慶》船中語

(目録 B)

- (21) 《春日龍神》 (22) 《龍田》 (23) 《西行桜》 (24) 《天鼓》 (25) 《雲林院》 (26) 《阿漕》 (27) 《半部》 (28) 《黒塚》
- (29) 《山姥》 (30) 《舟弁慶》 (31) 《牢太鼓》 (32) 《三井寺》 (33) 《鶴》 (34) 《鶉飼》 (35) 《鐘馗》 (36) 《殺生石》
- (37) 《舍利》 (38) 《項羽》 (39) 《野守》 (40) 《楊貴妃》 (41) 《松風》 (42) 《東北》 (43) 《江口》 (44) 《鞍馬天狗》 (45) 《実盛》 (46) 《当麻》 (47) 《東岸居士》 (48) 《小塩》 (49) 《芭蕉》 (50) 《盛久》 (51) 《梅枝》 (52) 《通盛》 (53) 《葛城》 (54) 《女郎花》 (55) 《遊行柳》

(A) 部分には二番目物・三番目物・四番目物の順という緩やかな配列意識が見られるが、(B) 部分にはこのよう

な配列意識は見られない。本書はワキ方にとって特に重い曲は含まれておらず、むしろよく舞台にかけられた曲の稽古用に編まれたものと考えてよいだろう。近世末から明治時代の高安流の台詞については従来明らかにされていないので、今回翻刻・紹介したい。

(凡例)

底本に忠実に翻刻する事に心がけたが、読解の便宜を考え、以下の点について改めた。

- 1、旧字体は原則として新字体に改めた。
- 2、私に句読点を施した。
- 3、ワキ方担当部以外の、謡曲・狂言本文の引用と考えられるものは「」で囲んだ。(B)部分の狂言本文には朱書きのものもあるが、他の部分と同筆と考えられるので、墨色による区別は行わなかった。
- 4、能の曲名は《》で囲んだ。
- 5、底本の書き入れは○で囲み、その書き入れの該当部分に示した。
- 6、底本の作成の段階で、最初から意図して小さい文字で書き入れたと考えられる部分は□で囲んだ。
- 7、底本の墨消ちとなっている部分は■で囲んだ。
- 8、飯塚が解説のため書き入れた文は◇で囲んだ。
- 9、丁の綴じ目など判読出来なかった部分は□とした。
- 10、曲名の上の○欄に曲の順序をアラビア数字で記した。

(表紙)

『高安流脇世理賦附 坤』

(目録 A)

目録

- (1) 《田村》 (2) 《箴》 (3) 《八嶋》 (4) 《忠則》 (5) 《知章》 (6) 《巴》 (7) 《碇潜》 (8) 《敦盛》 (9) 《玉葛》  
(10) 《浮舟》 (11) 《夕顔》 (12) 《采女》 (13) 《佛原》 (14) 《俊成忠度》 (15) 《花月》 (16) 《小督》 (17) 《蘆刈》 (18)  
《海人》 (19) 《松虫》 (20) 飯塚注：目録不記 《船弁慶》 船中語  
右以上十九番其他番末ニ記ス。此附ニ無之分仕舞附ニ悉皆記在。

(本文)

(1) 《田村》 せりふ

狂言カ、ル。御不審尤にて候。扱旁ハ此邊りの人にて候か。シカク。左様に候ハ、先近ふ御入候へ。物を尋度事の候。シカク。思召寄さる申事にて候へとも、当寺の来歴、又田村丸の事、御存ならハ御物語候へ。懇に承候物哉。御身以前に童子壺人来られ、花の陰を清められ候程に、いか成人そと尋て候へハ、宮守成由申され、夫ニ付、当寺の子細、又田村丸の御事、唯今御身の物語のことく懇に承り、其後此所の名所旧跡教給ひ、田村堂の内陣に入給ふと見て、姿を見失ふて候よ。我等も左様に存候間、暫とうりう申、重てきとくを見うするニて候。頼申候。

(2) 《箴》 せりふ

シカク。御不審尤にて候。扱旁ハ此邊りの人にて候か。左様に候ハ、御入候え。物を尋度事の候。思召よらぬ申事

ニて候へ共、箆の梅の子細、御存ならハ物語候え。懇に承候物哉。御身以前に若キ男の来られ候程に、是成梅を尋て候へハ、箆の梅と名付られたる子細、又源平両家の合戦の有様、唯今御身の物語のことく承其後、景季の幽霊と名乗もあへす其儘姿を見失ひて候よ。我等も左様に存候間、暫逗留申、重てきとくを見うするニて候。

(3) 《八嶋》せりふ

シカく。是ハ主に借りて候。いやく出家の身として妄語ハ申さず。扱かたくハ此塩屋の主にて候か。左様ニ候ハ、先近ふ御入候へ、物を不審申たき事候。思召よらぬ申事にて候得共、此浦ハ源平両家の合戦の巷と承及ひて候。御存なき事ハ候まし。御物語候へ。懇に承候物哉。御身以前に老人と若キ男の来られ、此塩屋を借申され候程に、所からとて古へを思ひ、源平両家の合戦の様を尋て候へハ、懇に語り給ひ、其後義経の世の夢心、覺さて待と言もあへず、其儘姿を見失ふて候よ。後《田村》に同じ。間奈須ノ時、思召寄ぬ申事にて候へとも源平両家の合戦の様、又中にも奈須ノ與市扇を射たる躰、御存候ハ、そとまのふて御見せ候へ。終夜源平両家の合戦の様、尋て候えは、懇に承、其後如此也。(飯塚注：本文上部書添え)和泉流義、語ノ中ニ奈須を好所。狂言語懸て、「去程に其日の軍。」暫、迎モの事に那須ノ與市扇を射たる様躰そとまなふて御見せ候へ。

(4) 《忠則》せりふ

シカく。御不審尤にて候。扱旁ハ此邊りの人にて候か。シカく。左様に候ハ、先近ふ御入候へ。物を尋度事の候。思召寄ぬ申事にて候得共、若木の桜の謂、又忠度の果給ひたる有様御物語候へ。懇に承候物哉。愚僧は俊成卿の果給ひて後元結切り、ケ様の姿と罷成、此所初て一見申所に、老人壺人来られ忠度の詠哥の断、唯今旁の物語のことく懇に承其後、都へ言傳申さんと言もあへす花の陰にて姿を見失ひて候よ。我等も左様に存候間、今宵ハ此花の陰に候ひて、重てきとくを見うするにて候。シカく。頼申候。

(5) 《知章》せりふ

シカく。御不審尤にて候。扱旁ハ此邊りの人にて候か。シカく。左様に候ハ、先近ふ御入候へ。物を尋度事の候。シカく。思召寄らさる申事にて候へ共、是成磯辺に新敷卒都姿の候か、平の知章とかゝれて候。此知章の御事御存ならハ御物語候へ。シカく。懇に承候物哉。御身以前に若き男来られ、知盛の御事、又知章の果給ひたる子細、其月も日もけふに当りたる由申され、其後我も一門の内ぞといゝも敢す、汀の方へ行給ふと見て姿を見失ひて候よ。暫逗留申、彼御後を吊ひ申そうするにて候。頼申候。

(6) 《巴》せりふ

シカく。御不審尤にて候。扱旁ハ此邊りの人にて候か。シカく。左様に候ハ、先近ふ御入候へ。物を尋度事の候。シカく。思召よらぬ申事にて候得共、御身以前にかんなき壱人來られ、是成御社に詣、涙を流し玉ひし程に、不審をなして候へは、我か名ハ里人に問へと、いゝも敢す草の陰にて姿を見失ひ候。扱是ハいか様成人にて候そ。然々。さあらハ其巴御前の御事、御物語候へ。シカく。懇に承候物哉。是ハ木曾の山家より出たる僧にて候間、古郷の者とてなつかしく思召、巴御前のゆうれい顯れたると存候へハ、暫とうりう申、彼御後を吊ひ申さうするにて候。シカく。頼申候。思召よらさる申事にて候へ共、古へ木曾義仲、又巴御前の高名の子細、御存ならハ物語候へ。シカく。懇に承候物哉。御身以前に女性壱人來られ、是成神に參、愁傷のけしき見え候程に、不審をなして候へハ、古へ木曾義仲の神と祝ハれ給ふ由申され、唯今旁の物語のことく懇に承、其後、我か名ハ此里人に尋よと、いゝも敢す其儘姿を見失ふて候よ。シカく。我等も左様に存候間、暫とうりう申、重てきとくを見うするにて候。頼申候。

(7) 《碇潜》

御不審尤にて候。扱旁ハ此邊りの人にて候か。左様に候ハ、先近ふ御入候へ。物を尋度事の候。思召寄らぬ申事に

て候へ共、古此浦ハ平家の一門餘多果給ひたるよし承及びて候。御存ならハ御物語候へ。懇に承候物哉。御身以前に老人壱人、釣人の躰にて来られ候程に便船を申、是迄参りて候。夫ニ付、古の軍物語所望申て候へハ、唯今旁の物語のことく懇に承、其後一門の幽靈の後弔ふて呉よと言も敢す海に入と見て姿を見失ふて候よ。我等も左様に存、遙々都より下りて候間、しはらくとうりう申、彼御後を弔ひ申そふするにて候。

(8) 《敦盛》せりふ

シカク。御不審尤にて候。扱旁ハ此邊りの人にて候か。シカク。左様に候ハ、先近ふ御入候へ。物を尋度事の候。思召寄さる申事にて候得共、此處にて敦盛の果給ひたる子細、いかゞ風聞候そ。語て御聞候へ。シカク。懇に承候物哉。是ハ熊谷の次郎直実出家し蓮生法師にて候。シカク。いやゞ苦敷からず候。か様の姿と成、諸国を廻り候も、敦盛の菩提の爲にて候。又何とやらん一の谷ゆかしく候間、是迄参りて候處に、草刈あまた候ひしか、中にも壱人残りとゞまり、十念を受られ候程に、名を尋て候へハ、明ヶ暮レゑかうなす名を夫と、いゝも敢すかきけすやうに姿を見失ふて候よ。我等も左様に存候間、暫逗留申、敦盛の御後を御弔ひ申さうするにて候。頼申候。

(9) 《玉葛》せりふ

御不審尤にて候。扱旁ハ此邊りの人にて候か。左様に候ハ、先近ふ御入候へ。物を尋度事の候。思召よらぬ申事にて候へ共、古へ玉葛の内侍初瀬詣の子細御物語候へ。懇に承候物哉。御身以前に女性壱人、ちいさき船に棹さし来られ候程に、ふしんをなして候へハ、初瀬寺に詣来る由申され、夫ニ付玉葛の御事御身の物語のことく承、其後我後弔ふて呉よと、言もあへす其儘姿を見失ふて候よ。我等も左様に存候間、暫逗留申、彼御後を弔ひ申さうするにて候。

(10) 《浮舟》せりふ

狂言カ、ル。何レも同前。思召よらぬ申事にて候へ共、浮舟の御事御物語候へ。懇に承候物哉。御身以前に女性壱人、ち

いさき舟に棹さし来られ候程に、不審をなして候へハ、御身の物語のことく承り、其後何国に住人そと尋て候得は、住家は小野、者成由申され、猶物の氣の身にそひてなやむ身なりと、いゝもあへすかきけすやうに姿を見失ひて候よ。我等も左様に存候間、小野へ立越彼御後を弔ひ申そふするにて候。

(11) 《夕顔》せりふ

思召よらぬ申事にて候へ共、夕兒の上の御事、御存ならハ御物語候得。承候。懇に承候物哉。御身以前に女性壱人來られ候程に、此所を尋て候得は、何かしの院と承候程に、不審をなして候得は、夫に付夕兒の上の御事、御身の物語のことくかたり給ひ、散果し夕顔の夢に來ると、云もあへすかきけすやうに見失ふて候よ。我らも左様に存候間、有難き御経を誦誦申、彼御跡を弔ひ申さうするにて候。頼申候。

(12) 《采女》せりふ

前《田村》ニ同じ。思召よらぬ申事にて候へ共、古しへ此地に采女の身をなげ給ひたる子細、御物語候へ。懇に承候物哉。最前春日へ參詣申所に、女性壱人木を植給ひ候程に、不審をなして候へハ、木を植て神慮に叶ふ謂語申され、猿沢の池を見せうすると有て、是迄同道申て候へハ、古しへ采女の身をなげ給ひたる子細、唯今御身の物語のことく懇に承、其後采女の幽霊と、名乗もあへす池水に入給ふと見て姿を見失ふて候よ。我等も左様に存候間、暫とうりう申、彼御後を弔ひ申さうするにて候。頼申候。

(13) 《佛原》せりふ

思召よらぬ申事にて候得共、此所におゐて佛御前の果玉ひたるいはれ、御物語候へ。懇に承候物哉。御身以前に女性壱人來られ、けふハこゝろさす日にて候程に、佛事をなして呉よと申され候程に、亡者ハいか成人そと尋て候へは、古しへの佛御前の御事、唯今御身の物語のことく懇に承、其後此堂の主ハ佛よと言捨、草堂の内に入ると見て、姿を



見失ひて候よ。我等も左様に存候間、此草堂に逗留申、彼御後を弔ひ申さふするにて候。頼申候。

(14) 《俊成忠度》せりふ

いかに誰か渡候。誰も御座なけに候。直に持て参らふするにて候。いかに申候。岡部の六弥太忠澄か参りて候。

(15) 《花月》せりふ

清水寺門前の人の渡候か。シカク。是は此所初て一見の僧にて候。何にても面白き事の候ハ、見せて給り候へ。さあらは其花月とやらんを呼出し見せて給り候へ。後カ、ル 御不審尤にて候。某俗にて候ひし時持たる子にて候。かやうの姿と罷成候も彼者故にて候間、頓てつれて帰候へし。心得て候。

(16) 《小督》单狩衣モ用

出立、《富士太鼓》同様。大鼓右ノ手通にて名乗、答拜して踏廻、《小鍛冶》大臣のことく舞台仕手柱際にて「いかに此内に」と唄。「申上けれハ」と右足横へ大に引開、真正面向、左足引様下ニ居、両手付「此由奏間」と唄。「寮の御馬」と唄ながら膝立替、大夫江向。「頓て出るや」の打切にて本のことく膝立直シ立、笛の上へ行、角懸て立て居ル。「行衛哉」と大夫中入。脇もは入。早鼓也。さらくと入。金春流「誰にて渡候そ」と請ナシ。然らハ、太夫中ノ松当りへ来ると、「是ハ宣旨にて候。」と、唄へし。言合次第。

(17) 《芦刈》せりふ

草家の在所の人の渡り候歟。シカク。是は都方の者にて候。此所に草家の左衛門殿と申人ハ御座なく候歟。念頃に御教祝着申て候。都より女性上臈を同道申て候。其由申さふする間、暫く待有て給り候へ。謡有。さあらハ其由申さふするにて候。最前の人の渡り候歟。唯今の通申て候へハ、暫此處に御滞留有て、御行衛を御尋有らふするとの御事にて候。又何にても面白き事のあらハ見せて給り候へ。さあらはその芦売男を呼出シ見せて給り候へ。上 かくる目出度

事杜候ハね。<sup>上</sup>都方烏帽子直垂を持せて候。急て召れ候へ。シカく。<sup>下</sup>中くの事、草家の左衛門殿にて候。夫婦の機縁尽せず、ケ様に廻御逢候事、偏に傍の引合故と満足申て候。夫ハいか成事にて候そ。誠に能折節にて候ほとに、都へ同道（随分饗応）申さふするにて候。其哥は候。いやく左様にてハ有ましく候。難波の芦ハ伊勢の浜荻と杜承て候へ。いやくくるしからす候。又、左衛門殿に、烏帽子直垂を召され候ハ、急御出有れと申され候へ。大夫出ると<sup>上</sup>烏帽子直垂を召れ候へハ、一段と能若男に御成候。<sup>下</sup>さあらハ古へ今の御物語候へ。いかに左衛門殿、一指御舞候へ。誠に夫婦機縁尽せず、ケ様に廻り逢給ふハ、なんほう日出度事にて候。

伊勢の浜荻と杜承て候へ。又左衛門殿に烏帽子直垂を召れ候ハ、〔大蔵流杯ハ右両様の内にて宜く。山脇流大キに相違致候。言合へし。〕（飯塚注：《芦刈》の頭注）山脇流後会釈。「か様に廻り逢給ふ事、日出度御事にて、我等こときの者迄も目出たふ存る事にて候。」ト申シ、「誠に夫婦のこと、云」〇〇此一句過るト、シカく長シ。その留りハ「古哥の思ひ出られて候」。「其哥ハ候。」爰にて△「物の名も所によりてかハる」と言ト「いや左様にてハ」と言。「濱荻と杜承て候へ。」〇〇「又、左衛門殿」と直ニ言也。前のあしらい相違なし。）

(18) 《海人》 せりふ

当浦の人の渡候歟。少々物を尋度事の候。近ふ来りて給り候へ。思召よらぬ申事にて候へ共、当浦におゐて玉かつき上し海士人の果給ひたる子細語て御聞せ候へ。懇に承候物哉。今ハ何をか包候へき。是に御座候ハ房崎の大臣殿にて候よ。いやくくるしからす候。此所へ御下向なさるゝも、御母海士人の御追善の為にて候。則管弦講をもつて御弔有へきとの御事にて候間、一七日ケ間、当浦の殺生をも相止、又管絃を役者を相觸て給り候へ。近頃にて候。

(19) 《松虫》 せりふ

誠にけふハおそなわり給ひ候よ。扱旁へ不審申度事の候。思召よらぬ申事にて候へ共、此所におゐて、松虫ニ付色々

子細有由承及て候。そと御物語候へ。懇に承候物哉。此程市毎に若男の来り、某か酒を買吞候か、帰るさをしらす候程に、ふしんをなして候へハ、古の友人の亡霊来りたる由申され、虫の音にさそわれ姿を見失ふて候よ。シカク。

中くの事、酒にて候。扱旁ハ此邊りの人にて候歟。左様に候ハ、先近ふ御入候へ。物を尋度事の候。思召よらぬ申事にて候得共、此所におゐて松虫の音に付謂さまく有由申候。御存知ならハ語て御聞せ候へ。

懇に承候物哉。此程何国共なく若き男の来られ某か酒を吞候か、帰るさに酒宴をなし候程に、不審をなして候へハ、唯今御身の物語のことく承、其後、友人の亡霊成由申され、虫の音にまぎれ姿を見失ふて候よ。我等も左様に存候間、彼跡を弔ひ申さうするにて候。

(20) 《船弁慶》 船中語

狂言シカク。テツカイガミネ、サカヲトシノヨウ語レト候ヤ。サラバ語ツテキカシヨウズルニテ候。扱も<sup>上</sup> 去ル寿永三年<sup>上</sup> きさらぎ七日の曙に、<sup>下</sup> 我君三千餘騎を引率し。ひよ鳥越エに打揚り。<sup>上</sup> 須摩明石の朝なぎを詠め、<sup>上</sup> 平家の城郭を見をろし給ひ、<sup>下</sup> 馬ども落いて見んとて、<sup>上</sup> 小々落されけるに。<sup>中</sup> 中にてころび、あるいは足打折て落るも有。<sup>中</sup> 中にも、くらをき馬<sup>上</sup> 難なく落ちつきて。<sup>上</sup> 見振イしてこそ立ツたりけれ。<sup>上</sup> 垂レ々々の心得有。馬は損ずまじきぞ。<sup>上</sup> 判官を手本にせよとて落し給得ば。<sup>下</sup> 三千餘騎の兵共。<sup>上</sup> 轡ニてこゑを忍びにして、<sup>上</sup> てつかいが峯<sup>ミネ</sup>を直に落し。<sup>上</sup> ときをどつと作りけるは、<sup>下</sup> 誠におに神の所為とぞ見へたりける。<sup>下</sup> 平家の陣には驚きさわぎ。<sup>上</sup> 屋形仮屋に火をかけ、<sup>上</sup> 壺時が程に焼拂へば、<sup>上</sup> 追手からめてひとつになり。<sup>下</sup> 落ち行武者を追っかけ、<sup>上</sup> 我レ人の功名かくれなし。<sup>下</sup> 是ぞ我君判官殿の、てつかい(ガ)峯のサカ落しと、<sup>上</sup> 世に弓箭とる身の知らぬはなし。<sup>下</sup> 平家は船に取り乗り、散々に成り給ひ。<sup>上</sup> 終にだんのうらにて亡びしは、<sup>下</sup> まことに勇々敷我君の謀にては候はぬか。狂言シカク。

(目録 B)

- (21) 《春日龍神》 (22) 《龍田》 (23) 《西行桜》 (24) 《天鼓》 (25) 《雲林院》 (26) 《阿漕》 (27) 《半蔀》 (28)  
《黒塚》 (29) 《山姥》 (30) 《舟弁慶》 (31) 《牢太鼓》 (32) 《三井寺》 (33) 《鶴》 (34) 《鶉飼》 (35) 《鐘馗》 (36) ·  
《殺生石》 (37) 《舍利》 (38) 《項羽》 (39) 《野守》 (40) 《楊貴妃》 (41) 《松風》 (42) 《東北》 (43) 《江口》 (44) ·  
《鞍馬天狗》 (45) 《実盛》 (46) 《当麻》 (47) 《東岸居士》 (48) 《小塩》 (49) 《芭蕉》 (50) 《盛久》 (51) 《梅枝》  
(52) 《通盛》 (53) 《葛城》 (54) 《女郎花》 (55) 《遊行柳》

(21) 《春日龍神》

シカ々々。中々の事、梅の尾の明恵法師にて候。旁は当社の宮つこにて候か。シカく。左様に候ハ、先近ふ御入候得。物を尋度事の候。云々。思召寄らさる申事にて候得共、当社の御神秘御物語候へ。シカく。懇に承候物かな。我入唐渡天の志あるにより、御暇乞の為参詣申所に、老たる宮好子のきたられ、入唐渡天をおもひとまれと候間、いかなる人そと尋て候へハ、我こそ秀行と、名乗もあへす其儘姿を見失ひて候よ。シカ々々。餘りに有難き事にて候間、神前に通夜申、重てきとくを拝み申さうするにて候。シカ々々。頼申候。

(22) 《龍田》

御不審尤にて候。扱かたくハ此辺りの人にて候か。左様(に)候ハ、先近う御入候へ物を尋度事の候。覚食よらぬ申事にて候へ共、当社の謂、御物かたり候へ。懇に承候物かな。是六十余州御経を納る聖にて候か、御身以前に神巫壺人来られ、立田川を渡り候なと承候あいた、不審をなして候得は、夫ニ付龍田川の詠哥など御申有、其後はまだ同道申て候へは、立田姫は我なりと、いふも敢す御殿に入給候。餘り不思議に存候間、神前に通夜申、重て奇特を拝み申さうするにて候。頼申候。

(23) 《西行桜》

花見 是ハはや西三行の庵室に着て候。心静に花を詠うするにて候。尤にて候。いかに此内へ案内申候。是ハ上京邊の者にて候。御庵室のはな、今を盛りなるよし承候程に、これまで参りて候。そと見せて給り候へ。御大法ハ去事にて候へ共、若き者遙々参りて候程に、ひらに見せて給り候へ。心得申候。荒(面)白の時節かな。シカ々々。ウキ 何とて花見禁製なる由を申さぬそ。シカ々々。凡洛陽の花盛一、内へいれ候へ。シカ々々。是に候。下 夫ハ祝着申て候。心得申候。シカ々々。桜花咲にけらしな。

(24) 《天鼓》

いかに誰か有。シカ々々。老人を私宅に歸し候へ。シカ々々。近頃にて有。シカく。汝か申ことく親子のしるしにて鼓のなる事、君も神妙に思召候。去間、ろすいの江に御行き有て、天鼓をハ御弔ひ有へきとの御事にてある間、管弦の役者を相觸候へ。シカ々々。心得てある。

管弦構の時

中々の事。何にても旁に似合たる役を望ミ候へ。夫はせうと申候。シカ々々。いやく旁の分にてはなる間敷候。シカく。夫は笛と申候。シカ々々。夫はしちりきと申候。シカ々々。例には左様に申候共、中々成ましく候。シカく。夫ハ太鼓と申候。殊に是は申つぎにて候間、なる間敷候。シカく。是は一段と似合たる役にて候。急て管弦の役者を相觸候へ。シカく。心得て有。

(25) 《雲林院》

シカ々々。不審尤にて候。扱かたくハ此あたりの人にて候か。シカ々々。左様に候ハ、先近う来られ候へ。物を尋度事の候。シカ々々。思召寄らぬ申事にて候得共、此雲林院の子細、又業平の御事、語て聞され候へ。シカ々々。承候。シ

カ々々。懇に承候物かな。是ハ津国芦屋の里に、公光と申者にて候か、我いとけなかりし比より伊勢物語を手馴候處に、不思議の靈夢を蒙りて候程に、是まで参りて候得は、老人一人来られ、今宵は此花の陰に臥し、別れし夢を待へしと承り候程に、不審をなして候へは、業平の事を身の上のやうに言なし、其儘姿を見失うて候よ。シカ々々。我等も左様に存候間、今宵は花の木陰に候ひて、重ねてきとくを見うするにて候。シカ々々。たのミ申候。

(26) 《阿漕》

前《田村》に同じ。覚食寄らぬ申事にて候へ共、此浦を阿漕か浦と申子細、御物かたり候へ。シカ々々。懇に承候物かな。御身以前に釣人の来られ候程に、阿古木の子細尋て候へは、只今御身の物語のことく懇に承、其後さけふ声して姿を見失ひて候よ。シカ々々。我等も左様に存候間、有かたき御経を誦誦申、彼跡を弔らひ申さうするにて候。頼み申候。

(27) 《半部》

なふく此当りの人にて候か。左様に候ハ、先近う御入候へ。物を尋度事の候。思召よらぬ申事にて候へ共、古しへ五条わたりに夕顔のうへの住せ給ひし子細、御物語候へ。懇に承候物かな。我夏の間花の供養を執行ひ候所に、女性一人、白き花を立られ候程に、花のあるしハいか成人そと尋て候へは、夫ニ付夕顔の上の(御)事を我身のよふに言捨、花の陰にて姿を見失ひて候よ。我らも左様に存候間、五条わたりに立越、夕兒の上の御跡を弔らひ申さうするにて候。頓て跡より来られ候へ。

和泉流にてハ

狂言かゝり、「御見廻申て候。」御見廻祝着申て候。さてかたくへ尋度事の候。

間を勤むる相手により如此に替えてもいたす。宝生流ニ立花供養といふ事有。其時ハ脇せりふ習有。

(28) 《黒塚》

狂言かゝる 誠に行暮前後忘して候に、情深きあるしにて祝着申て候。シカ々々。汝か申ことく某も感し入て候よ。「扱最前山へ上り様に、主の閨の中な見そと申てこさる。人にこそよれ、阿闍梨に向ひケ様の事を申は不審な。某はそと見て参らふ。」いやくあるしと【(某シ)】契約したる間、無用に仕候へ。「阿闍梨御けいよくなさるれ。某ハ契約ハ至さぬ。見て参らふ。」いや主と某と堅く契約したる上に、押して見うすると有ハ、中々曲事にてあるそとよ。「ハア。」某もまどろむ間、汝も夫にて真眠候へ。シカ々々。汝は何方へ行そ。シカ々々。夫にてまどろみ候へ。シカ々々。せきはらい。近頃さわかしき者にて者にて有そ。急て真眠ミ候へ。シカ々々。是は不思議なる事を申候。シカ々々。さあらハ立越見うるにて候。シカ々々。かうわたり候へ。ツレ 心得て候。

大蔵流は両度共咳(マツ)わらひいたす。和泉流ハ

某も真眠む間、汝も夫にて真眠候へ。シカく有て、立ツ所にて、汝ハ何方へ行そ。シカく。「こわい夢を見ました。」夫にて真眠候へ。又立んとする時、何事にて有そ。「いや寝かへりをいたす。」近頃さわかしき物にて有そ。

(29) 《山姥》

堺川在所の人の渡り候か。「堺川の者のお尋ハ。」是ハ都方の者にて候。善光寺への道教て給り候へ。「仰のことく是方善光寺への道あまた御座候。御乗物の可せぬ道にて候。」念頃に御教へ祝着申て候。都方女性上臈を同道申て候。其由申さうする間、暫シハク御待あつて給り候へ。シカく。謡「路次のやうを尋申て候へは。道しるへしてたひ候へ。」

下 さあらハ其由申さふするにて候。最前の人のわたり候か。「是にて候。」只今の通り申て候へは、歩行にてあける越を御参り有へき由申され候程に、案内しや有て給り候へ。「些肖の事かこさるて御断申候。」仰尤にて候へ共、不知案内の事にて候程に、ひらに頼申候。「今日ハ叶ハぬ用の子細候へ共、初て御参と承候間、さあらハ案内者申さうする

にて候。」夫は祝着申て候。頓て御立有ふするにて候。さあらハ頓て御立候へ。「御覽候へ。殊の外けんなんにて候。」誠に承及たるよりも陰難なる道にて候。乗ものなどのかなふへき道にてハなく候よ。「荒不思議や。いまた暮ましき日にて候か、俄に暮て候ハいかに。」誠に日か暮るやうな。扱此あたりに宿はなく候か。「いや此あたりに宿は御座なく候。先も在所ハござれ共、跡よりも結句遠うござる。」狂言シカくの内に、「なふく御宿参らせふ。」「なふあれに御宿参らせふと申者の候。急て御借り候へ。」「心得て候。」して「是ハあけるの山とて人里遠き」

中入後

「又夜か明た。扱々奇特な事哉。いかに申候。又夜か明てござる。」誠に【夜明】俄に日の暮前後を亡して候に、又夜か明て祝着申て候。扱此處にてハ、毎もか様の事の候か。「毎日此山へ通ひ申せ共、ケ様の事は初てでござる。」夫に付、ふしん申(度)事の候。「夫ハいか成御事にて候ぞ。」かたくハ山中近く住人にて候か。山姥にハ何か成と申候ぞ。「其事にて候。爰元にも山姥に(成)物をとりく申傳へてハこされとも、中にも鰐口か成と承及て候。」其謂は候。「先山寺に有鰐口が谷へ落て、木の葉かとり付髪となり、鰐口か口となり、両の耳か(則)山姥の耳となり、日鼻か付、胴躰か出来て其儘山姥に成と申候。」いやく其分にてハ山姥にハ成間敷候。「いか様にも仰らるれハ、鰐口か山姥に成りつやうも存せぬ。又一説に牛に付て出る柴か成共申候。」是も謂の候か。「俄に牛か草臥てこさる依て、柴を捨、牛斗牽て帰つてござれハ、其跡て彼柴か山姥に成と申。是ハならふと存るにハ、其柴葎と芦とて有つたと申程によしあし引の山姥と申時ハ、是か山姥になつたかと存候。」いやく夫もうたかわしく候。「左様に仰らるれハ柴か山姥に成ふやうもこさらぬ。古イ木戸か成共申伝て御座る。」辞々左様の物も山姥にハ成かた【ふ】かろうと存候。其子細は候。「山寺に成共年久しい古イ戸か有つたと申か、大風に谷底へ吹落してこさるか、古イ戸の事なれハ板か離れて胴となり、さんか離れて手となり、ふちか離れて足と成て、山姥に成つたと承てこさる。」我等の承候は、山に住



鬼女とこそ承て候へ。木戸ハ弥敷候。「夫ハともあれいか(様)成御方なれハ、山姥の謂を御尋にて候そ。」今は何をかつ、ミ候へき。是に渡り候ハ都に隠れ(も)なき百麻山姥と申遊君にて御さ候よ。「夫に付て思し出した事かこさる。先の女か申事に、山姥の□□御うたひあれ。其時誠の姿を顕わさふすると申て候間、頓て御謡有て誠の姿を御覧あれかしと存候。」餘り不思議成事にて候間、一節所望申、誠の山姥の姿を見うする間、方々も木陰より見られ候へ。「左様に候ハ、我等も是にありて誠の姿を見ようするにて候。」さあらハ一ふし御うたひ候へ。

(30) 《船弁慶》

いかに此内へ案内申候。シカク。我か君を御供申て候。御宿を申され候へ。御忍にてある間、其分心得られ候へ。シカク。又明日ツハ西国へ御下向なさるゝ間、お船を用意致され候へ。シカク。近頃にて候。

中入後

「扱も哀なる事を見申て候物かな。只今しつかの我か君に名残を惜るゝ躰を見申し、扱此度御下向を如何成事ぞと存候得は、御兄弟の中によしなき□の候ひて、あらぬざんさうを申な□御中不和にならせ給て候。我君は親兄の礼一、ニタ度御下向と申候。惣て【我】わさワいハ下より発ると申か、か様の事て御座有ふや。最前お船の事を。」誠に静の我君に名残を惜しまるゝ躰を見申、武蔵も涙を流して候。「お船を用意」といふ句の次に、今日ツハ一段の天氣にて候程に、頓てお船を出そふするにて候。シカク。「実々是は御理リ」、の謡の内に、急き御船を出し候へ。シカク。

舟の中

シカク。今日ツハ日本一の天氣にて武蔵も満足申て候。シカク。一段と櫓手か揃ふて君も御機嫌にて候。シカク。夫はいかやう成事にて候そ。「此西国の舟奉行か仕たいか、何と御座有ふ。」過分取合申さふするにて候。シカク。い

や／＼武蔵に限って失念ハ有間敷候。「武蔵殿の左様仰らるれハ某か訴詔ハさつと済たといふものしや。エイ／＼。イヤあのむこやまへ、いな雲を突出した。あの雲かつれハかならず風になるか。」いかに船頭、何とや覽風か替つて候。随分精を出し候へ。シカ／＼。只船頭と武蔵に御任せ候へ。「ヤあら爰な人は最前船に乗さまから何ソソ一ト事おしやりそふに有たか、去れハこそした、かな事をおしやる。そなたやうな(ママ)人ハ船底へすつこんで御居やれ。」いや／＼、此者船中不案内の事にて候程に何事も武蔵に免シして給り候へ。シカ／＼。「弁慶船子に力ヲを合せ」、の謡の中に、お船をのけ候へ。「畏て候。エイ／＼。」

(31) 《牢太鼓》

いかに誰かある。シカ／＼。清次は大剛の者にて有間、籠の番を堅く仕候へ。「シカ／＼有て、狂言、籠の右の方に安座し、籠ゑ一人り言をいひて、「清次々々」と呼び、牢の破れたるを見て脇の前へ来り、下に居なから、「ぬけマござる。」抜たるとハ何か抜【有そ】て有そ。「シカ々々。「清次か牢を破つてぬけてござる。」去ハこそ左様の事を存、堅く申付て有に、汝か曲事にて有そとよ。「ハァ。」扱彼者に親はなきか。シカ／＼。子ハなきか。シカ々々。妻はなきか。シカ々々。急連て来り候へ。シカ／＼。「今の女を引立て」の同音の内に、いかに誰か有。シカ／＼。急き牢者せさせ候へ。「シカ々々。狂言、牢の左りの角の脇ト、牢の間に立て、「清次こそのかしたれ。汝は逃すまいぞ。かきめ。」ト太刀に手をかくる時、」やあ女に向つて太刀かたなハ入ましきぞ。籠のまはりに太鼓を釣つて時を【作】(打)つて番を仕候へ。「シカ／＼。狂言作り物右の角へかつこを釣し、時を十ヲ打て座ス。「人を見ぬ目の涙かな。」狂言かゝる。「女か物に狂ひ候。」心得て有。爰にて狂言〈飯塚注：以下綴目判読不可〉

(32) 《三井寺》

〔脇着せりふ済て座付ト、狂言かゝる。〕汝か申ことく毎もの事とは申なから、今宵の月ハ一入隅なきやうに覺へて候。

又小人の伴ひて有間、何にても一曲かなへて候へ。「小舞有て、橋かゝりの方をミて色々喧流り、「三位殿く」ト呼フ。」<sup>三位</sup>何事にてあるそ。シカタ々。いやく左様の者は無用に仕候へ。(狂言憑ミあらハ)いや無用にて有、ト言てもよし。

(33) 《夜鳥》

芦屋の在所の人の渡り候か。行暮たる修行者にて候。一夜の宿を御かし候へ。御大法は去事にて候得共、ひらに一夜を御かし候へ。是非に及ハす候。夫ハ祝着申て候。あの堂ハかたくかかる迄もなく候。「アノ堂からハ夜々光物がづるぞや。」法力を以て泊る間苦しからず候。「テモすによい坊主かな。」

中入後

狂言かゝる かたくハ最前宿をかし給ハぬ人にて候か。御見舞祝着申て候。先近う御入候へ、物を尋度事の候。覚召よらぬ申事にて候へとも、古しへ近衛の院の御宇に、頼政か矢前にかゝつて身を亡せし鶴と申ものゝ子細、御物語候へ。懇に承候物かな。今宵船人の躰にて不審成者の来りて候程に、いか成者【の】(そ)と尋て候得ハ、古しへ近衛の院の御宇に頼政か矢さきにかゝつて身を亡せし鶴と申者の亡身なる由申【れ】て候程に、其時の有様尋て候へは、只今御身の物語のことく懇に承、其後うつは船に乗と見て姿を見失ひて候よ。我等も左様に存候間、有難き御経を以て弔らひ申さうするにて候。頼申候。

和泉流

語の中に、「十八刀さいたる」と申。暫九の刀とこそ承りて候へ。「中々の事、太刀で突程にく、疵か裏表へ通つて十八刀」と、如此も頼によりて会釈遣ス。

(34) 《鶉飼》

伊澤川在所の人の渡り候か。行暮たる修行者にて候。一夜の宿を御借し候へ。御大法ハ去事にて候へ共、ひらに一夜を御借し候へ。是非に及ハす候。夫は祝着申(て)候。あの堂ハかたくゝにかる迄もなく候。法力を以て泊る間苦しからず候。

中入過

かたくゝハさいせん宿をかし給ハぬ人にて候か。御見舞祝着申て候。先近う御入候へ。物を尋度事の候。思召よらざる申事にて候得共、此二三年さきにふしつけになりたる鶉遣ひの子細御物かたり候へ。懇に承候物かな。今宵此堂に泊り候處に、老人一人来られ、此處の鶉遣ひ成由承候程に、老躰の身にて殺生の業勿躰なき由申て候へハ、夫ニ付ふしつけに成たる鶉遣ひものゝ子細、御身の物語のことく承り、其後やミ路に迷ふ此身なりと、云も敢す其儘姿を見失ひて候よ。我等も左様に存、毎日妙なる御経を一石に一字書付、波間に沈め弔らハふするにて候。頼ミ申候。

(35) 《鐘馗》

前《田村》同様。思召よらざる申事にて候へ共、高祖李洵皇帝の御代の鐘馗と申進士の事、語て御聞セ候へ。懇に承候物かな。我帝都に趣候處に、童子一人来られ、古しへ高祖の代に鐘馗といふ者なる由、只今御身の物語のことく承、(其後)一念しんるを翻し、後世に名を残し度由奏聞せよと仰候間、其瑞相を見せ給へと申て候へハ、忽気色替り、こくうに上り、地に入り、山彦の如く声斗して姿を見失ひて候よ。餘りに不思議成事にて候間、重て奇特を窺ひ、其後奏聞申さうするにて候。頼ミ申候。

(36) 《殺生石》

急候程に那す野、原に着て候。「アレ落ルハく。」汝は何事を申そ。シカく。是不思議成事を申候。さあらハ立越見

ようするにて候。

中入過

狂言かゝる 何事にて候そ。不審尤にて候。汝は□惠者にて有間、玉藻の前の子細語て聞セ候へ。汝は玉藻の前の事を能存てあるものかな。愚僧も不審におもひ名を尋て候へは、古しへは玉ものまへ、今は那す野々殺生石、その石魂なる由申て候。定て成佛の望ミ有、愚僧(に)【と】詞をかわしたると存候間、彼石魂の輪廻を一十棒に打破し、成佛させうするにて候。「さあらは拂子を参らせふ。」

(37) 《舍利》

いかに此内へ案内申候。是ハ出雲の国三ほの関より出たる僧にて候か、承及ひたる仏舍利を拜ませて給り候へ。御大法ハ去事にて候へ共、ひらに拜ませて給り候へ。夫は祝着申候。「かうく御通り候へ。」

中入過

狂言かゝる 辞々我等ハ存せず候。いや出家の身にて亡語ハ申さす候。それニ付思ひ合する事の候。最前かたくをたのみ佛舍利を拜ミ申所に、人音のきこへ候程に、不審をなして候へは、此あたりの者なるか、御舍利を拜まん為来りたる由申され、其後、昔の足疾鬼か執心と、言も敢す舍利殿にのそミ、天井を蹴破り、こくうに上ると見て姿を見失ひて候か、若か様のものゝ仕業にて有へきかと存候。シカく。我等の存候は、韋駄天に祈誓御申あれかしと存候。いや上代も今も神力佛力に替りハ有間敷候。急韋駄天に祈誓御申候へ、随分力を添へて参らせふするにて候。心得申候。

(38) 《項羽》

狂言かゝる 是はむかいより越して候。いやく毎もの草苳にて候程に妄語は申さす候。夫ニ付、方々へ尋度事の候。

近う来り（て給り）候へ。思召よらぬ申事にて候得共、項羽・高祖の戦ひのよふ、又美人草の謂、御物語候へ。念頃  
に承候物かな。今日も毎ものことく草（ヲ）苳、家路に帰り候所に、老人一人船に棹さし来られ候程に、【則某も】便  
船をなし、此方へ越て候得は、草花を所望申され候程に、則參らせて候。夫ニ付美人草の謂、項羽高祖の戦の様語り  
給ひ、其後項羽か幽霊と名乗も敢す、其儘すかた（を）見失ひて候よ。我等も左様に存候間、御跡弔らひ申さうする  
にて候。たのミ申候。

(39) 《野守》

狂言かゝる 是は出羽の羽黒山より出たる客僧にて候。扱方々ハ此あたりの人にて候か。左様に候ハ、先近う御入候  
へ。物を尋度事の候。思召よらざる申事にて候得共、是成水を野守の鏡と申子細語て御聞せ候へ。懇に承候物かな。  
御身以前に老人一人来られ候程に、是なる水を尋て候へは、只今かたくの物語の如く承り、其後野守といふも我な  
れハ鏡を見すへき由、言も敢す、是なる塚に入と見て姿を見失ひて候よ。我等も左様に存候間、塚の前にてかんとん  
をくだき一ト祈いのり、重ねて奇特を見うするにて候。頼ミ申候。中入より有時、廻賦習あり。

(40) 《楊貴妃》

とこ（よ）の在所の人の渡り候か。是は唐土より始而此土にわたりて候。此所に楊貴妃と申御方ハ御座なく候か。懇  
に御教へ祝着申て候。さあらハ立越尋うするにて候。頼申候。

(41) 《松風》

須磨の在所の人の渡り候か。是は諸国一見の僧にて候。又あれ成磯辺に一ト木の松の候に、札をうち短冊を懸られて  
候。謂のなき事ハ候まし。教て給り候へ。懇に御教へ祝着申て候。さあらハ立越逆縁なから弔ひ申さうするにて候。  
頼ミ申候。

(42) 《東北》

東北院門前の人の渡り候か。是は東国方より此所始て一見の僧にて候。又あれに色美しき梅花の候。名のなき事ハ候まし。教へて給り候へ。懇におしへ祝着申て候。さあら立越詠ふするにて候。たのミ申候。

中入過

狂言かゝる 誠に方々は最前此梅を教へ給ひたる人にて候な。左様に候ハ、先近う御入候へ。物を尋度事の候。思召よらぬ申事にて候得共、当寺の子細、又和泉式部の御事、御存知ならば御物かたり候へ、承候。懇に承候物かな。最前是成梅に詠入休らひ候所に、如性一人来られ、和泉式部此梅を植置、軒端の梅と名付、めかれせず詠め給ひ候謂、御身の物語の如く念頃に承、其後、我こそ梅のあるしよと、言もあへす花の陰にて姿を見失ひて候よ。我等も左様に存候間、有難き御経を誦誦申、彼御跡を弔らひ申さうするにて候。頼ミ申候。

(43) 《江口》

江口の在所の人の渡り候か。是は都方より此所始て一見の僧にて候。江口の長の旧跡を教へて給り候へ。念頃に御教へ祝着申て候。さあらハ立越一見申さうするにて候。頼申候。

中入後

方々は最前旧跡を教へ給ひたる人にて候か。左様に候ハ、先近う御入候得。物を尋度事の候。思召よらぬ申事にて候得共、江口長の子細、御物語候へ。念頃に承候物かな。最前旧跡を一見申、此所にて西行法師の読れたる詠哥、何となく口号む所に、女性一人来られ、何とな惜まぬよしの返哥を申さぬそと承候程に、いか成人そと尋て候へは、江口の君の幽霊と名乗も敢す声斗して姿を見失ひ候よ。我等も左様に存候間、暫逗留申、彼御跡を弔らひ申さうするにて候。頼申候。

(44) 《鞍馬天狗》

いかに能力、少人を伴ひて有間、何にても一曲撫候へ。小舞 暫、当山にて左様の事ハ無用に仕候へ。花は明日にても見うするにて候。皆々御立候へ。

又

狂言かゝる 汝か申ことくいつの春よりも一入面白きやうに覚へて候。又少人を伴ひて有間

(45) 《実盛》

狂言かゝる 誠に今日はおこ<sup>ママ</sup>たれて候よ。何と日中の以後、愚僧か独言を申とて篠原の面々ふしんと候や。夫ニ付、かたくへ尋度事の候。古しへ此所に於て、長井の斎藤別当実盛の果給ひたる子細、語て御聞せ候へ。其後面面の不審を晴らし申さうするにて候。念頃に承候物かな。愚僧【も】(か)独言を申と承候も餘の義に非ず。此程日中の已後、老人一人来られ十念を受られ候か、某もふしんにおもひ、名を尋て候へは、斎藤別当さねもりの幽霊と、名のりも敢す池の辺りにて姿を見失ひて候よ。愚僧も左様存候間、昧時の踊念佛をもつて彼跡を弔ひ申さうする間、篠原の面々に相觸て給り候へ。近頃にて候。

(46) 《当麻》

門前の人の渡り候か。是は此所始て一見の僧にて候。些物を尋度事の候。此方へ来りて給り候へ。思召よらぬ申事に候得共、当寺に於て中将姫・化佛、曼荼羅を織給ひたるいわれ、御物語候へ。懇に承候物かな。御身以前に老尼と若き女の来られ、唯今御身の物語のことく承、其後古しへの化尼化女なる由、言も敢す花ふり異香薫し、紫雲に乗、山上し給ひて候よ。我等も左様に存候間、弥信心を致し、重て奇特を拜ミ申さうするにて候。頼申候。



(47) 《東岸居士》

清水寺の門前の人の渡り候か。是は東国方より当寺始て参りて候。都は人の集りにて候程に、何にても面白き事のあらハ見せて給り候へ。さあらハ其東岸居士とや覽を見せ給り候へ。【さあらは】

(48) 《小塩》

前《田村》同し。思召よらぬ申事ニて候へ共、此大原の明神の御事、后宮行啓の子細御物語候へ。懇に承候ものかな。御身以前に老人一人花の枝をかさし来られ候程に、いか成人そと尋て候得は、二条の後此所へ行啓の子細、只今御身の物語りの如く念頃に承、其後貴賤にまきれ姿を見失ひて候よ。我等も左様に存候間、今宵は此處に候いて重て奇特を見うするにて候。頼申候。

(49) 《芭蕉》

狂言かゝる。誠に此間は怠られて候よ。尤にて候。先近う寄て御物語候へ。思召よら【ぬ】さる申事にて候得共、芭蕉に附謂様々有へし。中にも雪の中のはせをの偽れる姿とやらん申子細、語て御聞せ候へ。承候。懇に承候かな。我誦誦の声怠らさる折節女性一人来られ、庵りの内をかし候へと承候程に、結縁の為御経を聴聞させて候へは、法の理り明らかなる人にて候程に、ふしんをなして候へハ、雪の中の芭蕉の偽れる姿といふもあへす鐘の音紛れ姿を見失ひて候よ。我等も左様に存候間弥有かたき御経を誦誦申、重て奇特を見うするにて候。さあらハ重て御入候へ。

(50) 《盛久》

狂言かゝる。汝か申ことく、某も感し入候よ。シカ々々。其事にて候。毎日清水の観音の信し申され候間、観音の利生と存候。又盛久に烏帽子直垂を召れ候ハ、急き御前へ御参りあれと申候へ。シカく。

(51) 《梅枝》

前《田村》ニ同し 思召よらぬ申事にて候得共、古しへ当国の楽人富士夫婦の子細御物語り候へ。念頃に承候物哉。最前村雨の降来り候程に、宿を仮て候へは、則宿を借し給ひて候。又太鼓、同じく舞の衣裳の候程にふしんをなして候へは、夫ニ付富士夫婦の事、只今かたくの物かたりの如く懇に承、其後、立帰る執心を晴らして呉よといふも敢す【姿】かきけすやうに姿を見失ひて候よ。我等も左様に存候間、妙なる御経を讀誦し、彼跡を弔ひ申さふするにて候。たのミ申候。

(52) 《通盛》

狂言かゝる 誠に今日ハ怠られて候よ。扱方々へ不審申度事の候。思召よらぬ申事にて候へ共、此浦ハ平家の一門あまた果給ひたると聞及て候。中にも誰々果給ひて候そ。御物語候へ。念頃に承候物かな。夜なく御経を讀誦申所に、魚翁夫婦来られ、御経を聴聞申され候程に、終夜平家の一門果給ひたる有様尋て候得は、只今御身の物語の如く懇に承、其後通盛夫婦の事を身の上のやうに言捨て、海に入と見て姿を見失ひて候よ。我等も左様に存候間、弥有難き御経を讀誦申、彼御跡を弔らひ申さうするにて候。頼ミ申候。

(53) 《葛城》

是は出羽の羽黒山より出たる山伏にて候。扱かたくハ此辺りの人にて候か。左様に候ハ、些物を尋度事の候。近う来りて給り候へ。思召よらぬ申事にて候へ共、葛城の明神の御事語て御聞せ候へ。懇に承候物かな。最前俄に雪の降来り候間、岩陰に立寄休らひて候へハ、女性壱人来り給ひ、我か庵りに立寄雪をはらせと仰候程に、是迄同道申、其後、我に五すいの苦しミあり、祈加持せよと言も敢す神かくれに失給ひて候よ。余り奇特なる事にて候間、夜もすから法味をなさふするにて候。さあらハかたくも此處に通夜申され候へ。

(54) 《女郎花》

前《田村》同様 思召よらぬ申事にて候得共、古しへの小野、頼風夫婦の子細、また女郎花の謂語て御聞せ候へ。懇に承候物かな。御身以前に老人一人来られ、女郎花の詠哥など申され、是迄同道申て候得は、男塚女塚を教しへ給ひ、頼風夫婦の事を我身の上のやうに言捨、更行月に姿を見失ひて候よ。我等も左様に存候間、暫逗留申、彼跡を吊らひ申さうするにて候。たのミ申候。

(55) 《遊行柳》

狂言かゝる 御ふしん尤にて候。是は諸国遊行の聖にて候。偕かた／＼ハ此辺りの人にて候か。左様に候ハ、先近う御入候へ、物を尋度事の候。シカ／＼。思召よらぬ申事にて候へとも、朽木の柳の謂御物語候へ。シカ／＼。懇に承候物かな。御身以前に老人一人来られ、昔の道しるへすへき由申され。是々へ同道申、此柳の謂、御身の物語のことく承、其後則十念など受給ひ、柳の木の本に立寄と見て姿を見失ふて候よ。シカ／＼。我等も存候間、有かたき御経を讀誦申、重て奇特を見うするにて候。シカ／＼。たのミ申候。

〈奥書・鈴木九平の筆〉

明治十五年

十一月調之 鈴木九平

此世理賦附仁・義・禮・智・信五冊

之仕舞附ニ相添置可申事

〈所蔵を示す印：川村

注

- 1 川村類造手沢本『高安流脇仕舞附 乾』「椋山国文学」椋山女学園大学国文学会 2004年3月発行 p 89-117
- 2 本書は川村類造旧蔵本『高安流脇仕舞附』の名で五回に分けて「名古屋芸能文化」に翻刻・掲載された。詳細は以下の通りである。
- ① 「仁」冊 「新城 川村類造旧蔵本『高安流脇仕舞附』(一)」 拙稿 「名古屋芸能文化」名古屋芸能文化会 第8号 1998年12月発行 p 9-38
- ② 「義」冊 「新城 川村類造旧蔵本『高安流脇仕舞附』(二)」 拙稿 「名古屋芸能文化」名古屋芸能文化会 第9号 1999年12月発行 p 48-77
- ③ 「礼」冊 「新城 川村類造旧蔵本『高安流脇仕舞附』(三)」 拙稿 「名古屋芸能文化」名古屋芸能文化会 第10号 2000年12月発行 p 25-54
- ④ 「智」冊 「新城 川村類造旧蔵本『高安流脇仕舞附』(四)」 拙稿 「名古屋芸能文化」名古屋芸能文化会 第11号 2001年12月発行 p 20-43
- ⑤ 「信」冊 「新城 川村類造旧蔵本『高安流脇仕舞附』(五)」 拙稿 「名古屋芸能文化」名古屋芸能文化会 第12号 2002年12月発行 p 52-76

なお、これら五点の拙稿はすべて『近世・近代能楽資料の収集・整理とデータベース化―東海地域を中心に―』(平成12年度～平成14年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)研究成果報告書 課題番号 12610457 研究代表者 飯塚恵理人 平成15年3月発行)に収録されている。

〔付記〕 貴重な資料の閲覧・翻刻を許可頂きました川村直子氏に心より感謝致します。また貴重な御教示を頂きました故大原紋三郎氏・笥鉦一師に心より感謝致します。本稿は平成十六年度科学研究費助成基盤研究（C）による成果の一部となります。